

繁華街の機能・空間集積と持続的コミュニティに関する研究 その6

日大生産工(院) ○荻野 汐香 日大生産工(院) 川原 隆平
日大生産工(院) 宮尾 直希 日大生産工 北野 幸樹

1. はじめに

本稿は前稿（その5）に引き続く一連の研究である。前項では、繁華街に訪れる来街者に対し、繁華街の現状とその役割、また、街づくり活動について視座を置き、整理を行なった。本稿では、新宿ゴールデン街に訪れる来街者が居住地周辺の繁華街に対する期待と活動とよく利用する繁華街に対する期待と活動、また店舗運営者の意向や活動の双方を照らし合わせ、新宿ゴールデン街が持続する手法に関する基礎的知見を得ることを目的としている。

2. 調査概要

調査対象者は新宿ゴールデン街を訪れていた来街者に限定し、前項と同様のアンケート調査を行った。また、新宿ゴールデン街の店舗運営経験を持つ2名にヒアリング調査を実施した。

表 1 回答者概要

年齢（歳）	20～29	30～39	40～49	50～59	60～69	70～79	80～89	合計
男性（人）	7	5	7	3	2	1	0	25
女性（人）	5	4	2	3	0	0	1	15
総数（人）	12	9	9	6	2	1	1	40

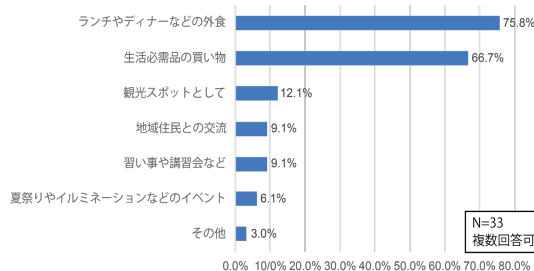


図 1-1 利用目的（居住地域周辺の繁華街）

3. 繁華街の利用目的と満足度

来街者の居住地域周辺の繁華街とよく利用する繁華街について、利用目的、満足度を調査した。居住地域周辺の繁華街を利用する目的として、食事や生活必需品の買い物など日常生活に密接に関わる目的で利用する人々が多くみられた。これより居住地域周辺の繁華街は生活の拠点であると言える。また、よく利用する繁華街は、食事に継ぎ地域住民との交流や観光スポットとして訪れる人が居住地周辺繁華街に比べ多くの人々が求めていることがわかる。これらの目的に対し、来街者が繁華街を利用する上で満足しているかを5段階評価で調査した。居住地周辺の繁華街は交通アクセス、買い物に対し満足している人が多いが、景観や安全性に不満を持つ人が多く、生活の拠点となるための機能は果たしているが、居住環境に及ぼす害が強い事がわかる。一方、よく利用する繁華街は賑わいや総評は満足している人が多いが、景観や安全・安心に対して、不満に思う人が多く、地域居住者と来街者の双方が街に対する思いやりを持つ事が重要であると言える。

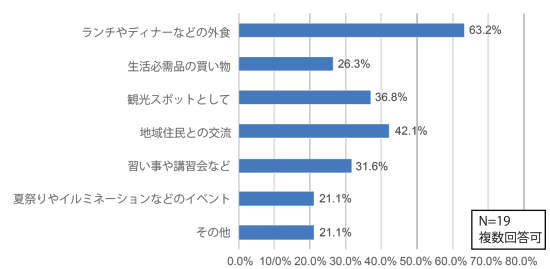


図 1-2 利用目的（よく利用する繁華街）

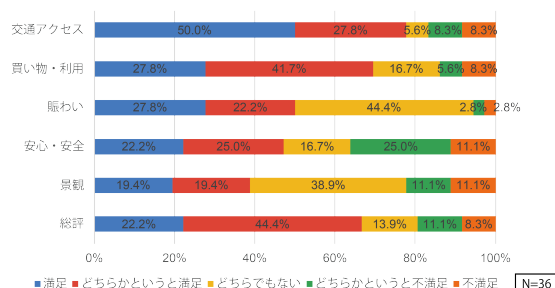


図 2-1 満足度調査（居住地域周辺の繁華街）

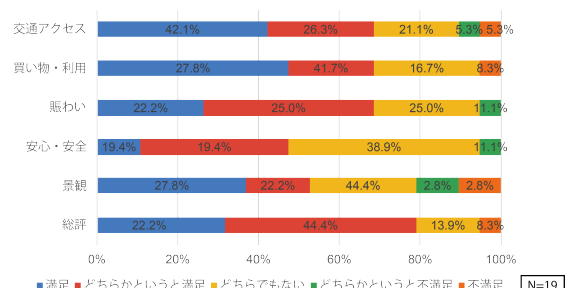


図 2-2 満足度調査（よく利用する繁華街）

Study on Relationship between Downtown Function, Spatial Concentration and Sustainable Community Part6

Shioka OGINO, Ryuhei KAWAHARA and Naoki MIYAO, Koki KITANO

4. 求められる環境・空間と活動

繁華街の利用目的や満足度から、人々の生活の拠点となり、地域コミュニティや第三者との出会いや賑わいを創出する空間である事が求められる。そのために、繁華街に求める環境・空間を調査すると共に、現在の繁華街をより魅力的かつ持続可能にするために必要だと思う活動を調査した。

居住地域周辺の繁華街に求められる環境・空間はよく利用する繁華街に求める環境・空間に比べ、リモートワークができるような環境・空間、近隣にある学校の学生たちが学んだことを自由に発表できる環境・空間など仕事場・学校以外に仕事や勉強を行う事ができる第三の居場所が求められている事がわかる。また、子供を自由に遊ばせる事ができる環境・空間や自然が多く、のんびり過ごす事ができる環境・空間など、安心・安全かつ景観の豊かさが求められていることがわかる。また、地域の方々と交流しやすい環境・空間や同じ趣味や興味を持つ人と出会える環境・空間はよく利用する繁華街同様に求められている環境・空間であり、居住地

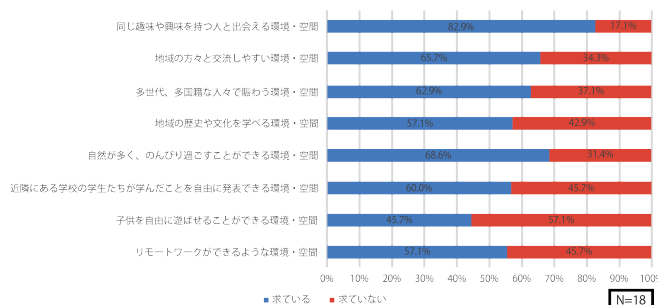


図 3-1 繁華街に求める環境・空間
(居住地域周辺の繁華街)

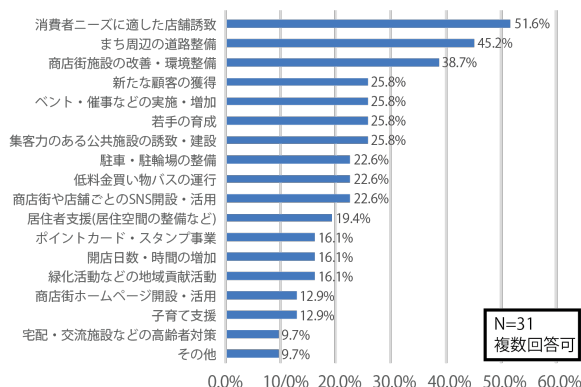


図 4-1 魅力向上のために必要だと思う活動
(居住地域周辺の繁華街)

域周辺の繁華街・よく利用する繁華街の双方で人との交流の場が求められている事がわかる。それに対し、居住地域周辺の繁華街の魅力を向上するために必要な活動においては、居住者支援や子育て支援、緑化活動などは低く、消費者ニーズに適した店舗の誘致が51.6%と一番多い回答を得た。一方、よく利用する繁華街の魅力を向上するために必要な活動においては、商店街施設の改善・環境整備といった商業機能の空間の改善と、若手の育成、新たな顧客の獲得といった人的資源の獲得といった二つの軸を基盤に繁華街そのものの持続性を考える必要がある事がわかった。

以上より、居住地域周辺の繁華街・よく利用する繁華街の双方で第三者とのコミュニティを形成する環境・空間が求められており、現在の繁華街の特徴である商業機能を中心とした賑わいから、人同士の交流による賑わいが求められている事がわかる。しかし、居住地域周辺の繁華街・よく利用する繁華街の双方に対し、行うべき活動に商業機能を中心とした繁華街の改善が求められていることから、繁華街の認識の再定義を行う必要があると考えられる。

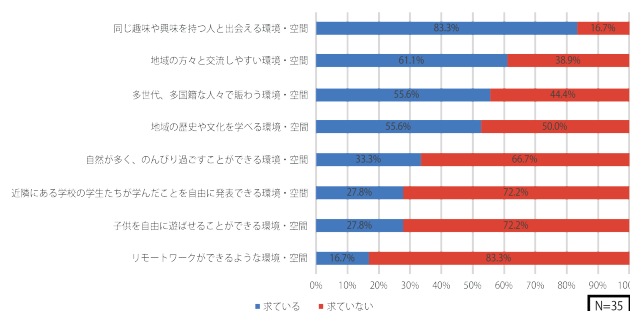


図 3-2 繁華街に求める環境・空間
(よく利用する繁華街)

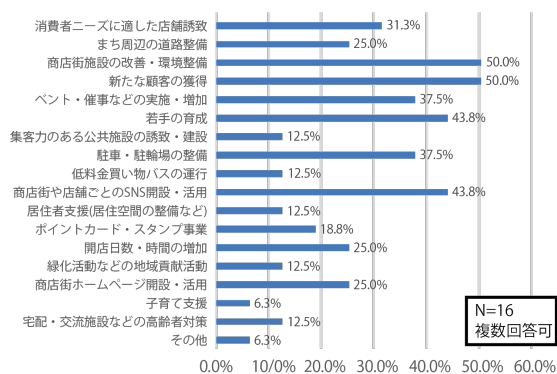


図 4-2 魅力向上のために必要だと思う活動
(よく利用する繁華街)

Study on Relationship between Downtown Function, Spatial Concentration and Sustainable Community Part6

Shioka OGINO , Ryuhei KAWAHARA and Naoki MIYAO, Koki KITANO

5. まちづくり活動への意識

今後、持続可能な繁華街にするためには、現在の商業機能の改善の他に、地域居住者・来街者の双方によるまちづくり活動や繁華街での活動・取り組みが重要だと考えられる。そこで、繁華街に対するまちづくり活動の認知度と意欲を調査した。まちづくり活動の認知度として、居住地域周辺の繁華街・よく利用する繁華街の双方で取り組んでいることを認知している人々が半数以上いることがわかった。また、よく利用する繁華街に対し、まちづくり活動に関心がないと答えた方が全体の三割のみであった。また、居住地域周辺の繁華街に対する街づくり活動への興味・関心より、よく利用する繁華街でのまちづくり活動の興味・関心が高いことから、自身の居住区域から離れた場所であっ

ても、愛着を持っている人が多い事がわかり、そのまちのために貢献したいという人がみられた。これらのことから、人が自身の居住区域外にも興味・関心を持ち、取り組む事ができれば、持続可能な繁華街として今後も賑わう事ができるのではないかと考える。

参加してみたい取り組み・活動に対し、居住地域周辺の繁華街・よく利用する繁華街の双方において、人との交流がメインとなるイベントへの参加が多く挙げられる。より多くの人々が集い、地域コミュニティによる賑わいの創出が行われることが、持続可能なまちづくりへ繋がると考えられる。一方、暮らしにまつわるまちづくり活動への意欲が低いことから、繁華街という都市的視座からだけではなく、人的視座からまちづくり活動を考える必要性がある。

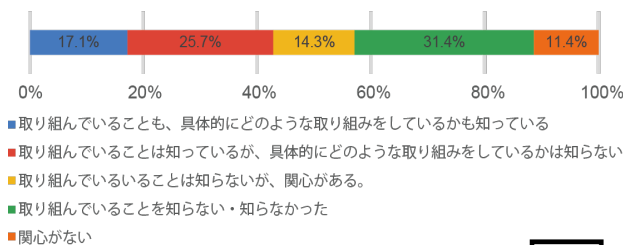


図 5-1 居住者主体のまちづくり活動の認知度
(居住地域周辺の繁華街)

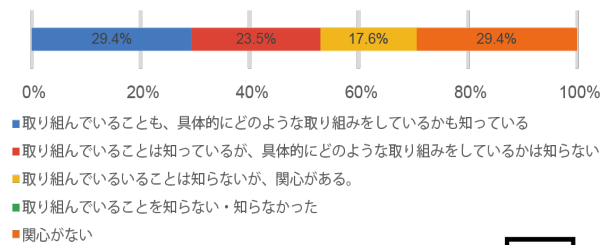


図 5-2 居住者主体のまちづくり活動の認知度
(よく利用する繁華街)

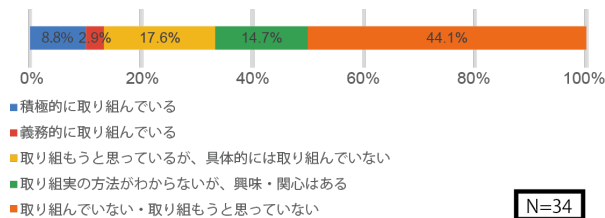


図 6-1 まちづくり活動への取り組み意欲
(居住地域周辺の繁華街)

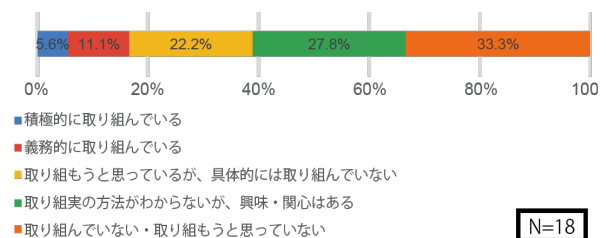


図 6-2 まちづくり活動への取り組み意欲
(よく利用する繁華街)

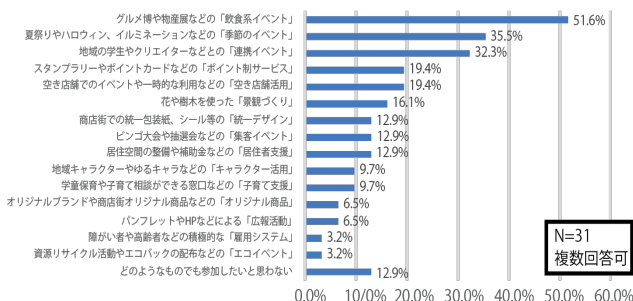


図 7-1 参加してみたい取り組み・活動
(居住地域周辺の繁華街)

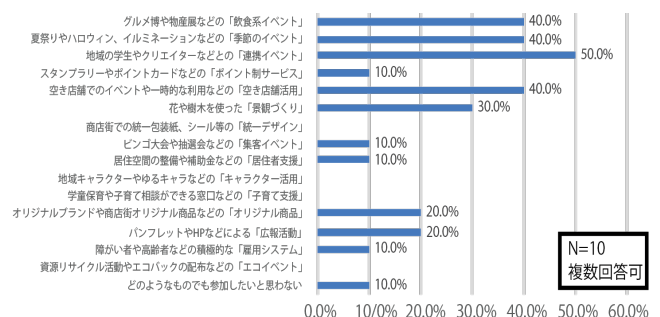


図 7-2 参加してみたい取り組み・活動
(よく利用する繁華街)

Study on Relationship between Downtown Function, Spatial Concentration and Sustainable Community Part6

Shioka OGINO, Ryuhei KAWAHARA and Naoki MIYAO, Koki KITANO

6. 店舗運営者から見るゴールデン街

繁華街の中でも、歴史的背景を持ち、現在も多くの来街者で賑わう新宿ゴールデン街で店舗を経営する2名にヒアリング調査を行った。1人目は、「しの」を経営していた、しのさん（80代、女性）と旦那さん（80代、男性）、2人目は、「ロベリア」を経営する、れいこさん（50代、女性）である。店舗運営者からみた、繁華街と地域居住者・来街者の関係性と、過去と現在での新宿ゴールデン街の違いや今後の存在意義を調査した。下記の図8はヒアリング調査から得たゴールデン街の魅力・特徴を時間軸とソフト面、ハード面の視座から16分野に分類したものである。ゴールデン街は昔と比べ、現在はぼったくりをする店舗はなく、喧嘩も起こらない健全な長屋横丁である。店舗内では性別・年代・国籍に関わらず、初めて出会う来街者同士がコミュニケーションを取り、交流の拠点となっていた。昔と比べ、性別・年代・国籍が幅広くなったが自然と第三者とコミュニケーションを取る事ができる場としては変化していない事がわかる。このようなコミュニケーション創出の場を今後も提供し続けるべく、ハード面の補修や、来街者が思いやりを持ち、店舗を利用する必要があると言える。

7. まとめ

本研究で得られた来街者、店舗運営者の視点で考える繁華街と持続的まちづくりの関係性に関する基礎的知見を以下に整理する。

- 1) 居住地域周辺の繁華街は生活の拠点、よく利用する繁華街は交流の拠点として利用する人が多い、繁華街によって目的を分けて利用する人が多い事がわかった。
- 2) 繁華街に求められている環境・空間と魅力を向上するために必要な活動にズレが生じている。
- 3) 繁華街でのまちづくり活動の興味・関心が高いが、いずれもイベントの参加など受動的であり、暮らしに直接関係する能動的な取り組み・活動意識は低いことがわかる。
- 4) ゴールデン街は第三者との交流が自然と生まれ、現在繁華街に求められている交流の拠点として昔も今も機能している事が言える。また、まちづくりに意欲的かつ愛着を持つ人の多さや、積極的にまちづくりを行う運営者の存在から、持続可能な繁華街であると言える。

参考文献

前項と同様である。

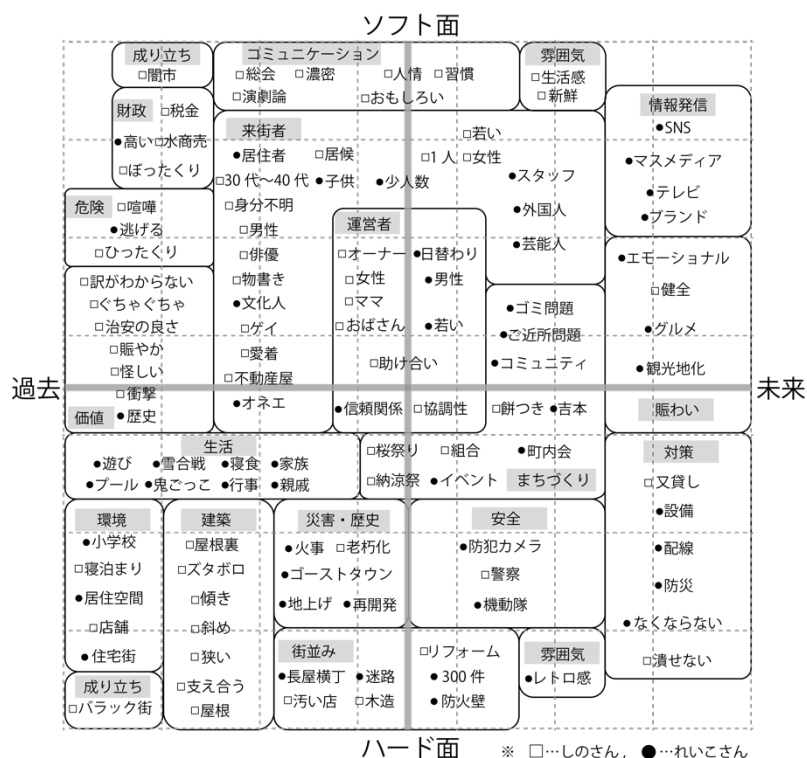


図8 運営者から見るゴールデン街の特徴

Study on Relationship between Downtown Function, Spatial Concentration and Sustainable Community Part6

Shioka OGINO, Ryuhei KAWAHARA and Naoki MIYAO, Koki KITANO